

# ともにつくる秦野

第3回定例会月会議では、主に令和7年度の予算執行について市政運営が妥当だったかを質疑しました。今号では決算総括質疑、また一般質問について、その一部をお知らせします。

会派を代表して、主に昨年度の施政方針の成果と課題について決算総括質疑を行った。広域消防体制、電子地域通貨・O-MO-TANコイン、人口の社会増の効果は、秦野市電子地域通貨事業基本計画にある地域経済の活性化では一加盟店舗数や登録ユーザー数、決済額等が目標に達成し「た」との答弁があったが、本来は店舗の売上率や地域通貨の再支出の増加、地域内収支等の経済指標を含めた目標にすべきではないかと抜本的な分析

計画の見直しを求めた。また本市の人口の社会増では、子ども・子育て支援や移住・定住促進等によって「令和7年も転入者が転出者を上回り、5年連続の社会増で、特に30代、40代の子育て世代を中心に、生産年齢人口が増え、2億円を超える税収の増加」との答弁があった。

一般的には人口の社会増の効果は様々ある。例えば合計特殊出生率や計量的な地域経済指標、雇用状況、賃金水準、1人当たりの市税総額等である。本市の人口の社会増では、何がどのように改善したのかを整理し、その目的に向かって取り組みことを強く要望した。



古木 勝久

4期目  
南が丘  
・総務常任委員会委員  
総括質疑は  
こちらから

☎090-6010-7129

また、課題として子育てに関する情報周知を強化することや公園遊具の老朽化への対応、日常管理への支援に努めると答弁があった。紙ベースの広報などではなかなか情報が届かないことから、子育て世代の保護者にはプッシュ型での情報周知を進めるとともに、秦野の豊かな自然を生かした遊びの環境を全庁連携で充実させることを求めた。



田中 めぐみ

1期目  
・曾屋  
・文教福祉常任委員会副委員長  
一般質問動画は  
こちらから

☎090-5752-8260

また、今後本市は市庁舎や学校など重要度の高い施設の更新を予定しているため、更新への影響について質問した。答弁は、令和11年度中には多世代交流施設整備による影響は大きくなく、ランニングコストを適切に管理しながら、将来の人口減少や財政状況を踏まえて判断すると答えた。被害が広がってからでは遅い。発見当日に動くよう、農業者や市民への周知、被害木の記録、人員と財源の確保、近隣自治体との広域連携体制をあらかじめ整えるよう求めた。

■「子どもたちの遊び」の環境を充実させよう  
現代の子どもたちを巡る運動不足や自然体験の減少、過度な安全志向等の課題を受け、本市における「子どもたちの遊び」の重要性と公園等の環境整備等について質した。

また、課題として子育てに関する情報周知を強化することや公園遊具の老朽化への対応、日常管理への支援に努めると答弁があった。紙ベースの広報などではなかなか情報が届かないことから、子育て世代の保護者にはプッシュ型での情報周知を進めるとともに、秦野の豊かな自然を生かした遊びの環境を全庁連携で充実させることを求めた。

商店街の街路灯の維持管理は全国的な課題となっており、市内でも街路灯の老朽化が進み、維持費や高額な撤去費が商店会を圧迫している実態を挙げ、市の支援体制や今後の対応について質問した。

■クビアカから秦野の桜と農業を守れ  
桜や梅、桃などを枯死させる特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」の周知、被害木の記録、人員と財源の確保、近隣自治体との広域連携体制をあらかじめ整えるよう求めた。

は公益性や緊急性を踏まえて判断すると答えた。被害が広がってからでは遅い。発見当日に動くよう、農業者や市民への周知、被害木の記録、人員と財源の確保、近隣自治体との広域連携体制をあらかじめ整えるよう求めた。

環境やアクセス改善と並行し、自然を守りながら整備を進める考えについて質した。市は、自然環境や文化財としての価値に配慮し、中井町と連携して安全な散策環境を整え、魅力向上に努めると答えた。



桑原 昌之

1期目  
・北矢名  
・環境都市常任委員会副委員長  
一般質問動画は  
こちらから

☎080-5375-3240

■商店街街路灯に着目しにぎわい創出へ繋げよう  
街路灯の問題は商店会の存続だけでなく、4駅にぎわいや中心市街地活性化など、本市の未来のまちづくりに直結することから、商店会任せにせず全庁的な支援体制を構築するよう求めた。



原 聡

2期目  
・今泉  
・総務常任委員会委員長  
一般質問動画は  
こちらから

☎090-2667-5499

■県立化も含め震生湖の未来を広域連携で拓け  
誕生から100年を超えた震生湖は、秦野市と中井町をつなぐ貴重な自然・歴史資源である。中井町側の副湖を含む周辺を震生湖の魅力を持たせ、周辺地域へ広げる視点が必要である。案内表示や学習機能を充実させ、地形・地質の成り立ちを学ぶ「ジオパーク」の視点を生かし、箱根や丹沢の資源とつながる散策拠点に育てたい。新たな「百年橋」の完成を契機に、両市町が将来像を共有し、次の100年を見据えた整備を進めるよう提案した。